『教行信証』の思想研究

――近代教学の成果を踏まえて――

延塚知道

本研究の成果は、出版物として刊行することを最終の目的としている。現段階では、全五章立てのうち、第四章までが完成しており、第五章は現在執筆中で、遅くとも年内には完成の予定である。したがって現段階の研究成果の報告としては、各章の概要を提示することをその代わりとしたい。

本研究は、研究概要でも述べた通り、清沢満之を嚆矢とする近代教学の方法論を通して『教行信証』を精読し、その思想的な課題、方法論等々を論じることによって、『教行信証』が何を主題とする書なのかを構造的に明らかにすることを目的としている。

まず第一章は、親鸞が『教行信証』を記す立脚地となった親鸞と法然との出遇いを尋ねる。

親鸞の比叡山での身分は、常行三昧堂の堂僧であったと伝えられる。したがって親鸞は『法華経』を中心とする天台教学だけでなく、勤行に使われたであろう『浄土三部経』、善導の『往生礼讃』や源信の『往生要集』にも既に精通していたと思われる。しかしおそらくは、向上的な自力の眼を以てそれらを読み通すことが出来なかったのではなかろうか。それによって明らかになってきたことは、因の本願に帰る仏道を説いて道俗貴賤を選ばない浄土教と、果の覚りに向かっ

て精進する顕密の大乗とがどう違うのかということであろう。七祖が皆そうであったように、聖道門と浄土門との異質性を解くことこそが、比叡山で丸十五年を要した親鸞の課題であったと思われる。やがて、聖道門は一乗を実現し得ないと見定めた親鸞は、比叡山を下山した。私は、下山後六角堂に参篭した親鸞の課題は、浄土教の念仏を体現し、自ら凡夫の目覚めを公言する法然に遇いに行くかどうかの決断にあったと推測する。

法然が浄土教を布教し始めたのは親鸞が三歳の頃であり、大原問答は親鸞が十三歳の頃である。当時、法然は智慧第一の法然房として有名であったが、聖道門の勢力から法然の念仏は世間に媚びた邪教であるという烙印を押されていた。それに親鸞は戸惑ったのではなかろうか。法然の説く浄土教に真実があるとすればそれは何か、それが六角堂参篭時の問いであろう。六角堂参篭の九十五日目に「女犯偈」とされる聖徳太子の夢告は、出家持戒を本とする聖道の道ではなくて、浄土教の凡夫の目覚めへと導く教言であろう。この夢告によって直ちに法然の下に馳せ参じることから、この時の親鸞の課題は、法然に教えを請うかどうか、また『浄土三部経』の中でも特に『大経』の本願の教えをどう読むかに凝集される課題であったと思われる。

法然との出遇いは、『歎異抄』や『恵信尼書簡』に語られている。そのいずれもが聞書であることから、私事を一切語らなかった親鸞が、法然との出遇いだけは生涯周りの人に聞かせていたと思われる。それは『教行信証』後序に、「雑行を棄てて本願に帰す」と語られるように、親鸞にとっては公なる出来事であったからであろう。その法然の教言は、「ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし」と語り告げられている。この教言は、法華の学場とは全く逆の方向の仏道を、法然は教えようとしている。既に比叡山で浄土教に精通していた親鸞にとっては、『大経』に説かれる本願が身にはたらくかどうかが問題であった。その実践の仏道の核心を、この法然の教えから聞き取ろうとしていたのである。

「いずれの行もおよびがたき身」、これが如来の智慧に見抜かれた、親鸞の目覚めの告白である。法然に、本願の不思議の智慧をわが身に教えられた親鸞は、生涯その解明に力を尽くすことになる。なぜ凡夫のままで本願の方から仏道が

実現されるのか。『教行信証』は、その本願の不可思議力の推究と言っても間違いではなかろう。このような法然の教えとの値遇によって、親鸞は念仏者として蘇ったのである。

この親鸞の出遇いの体験を言い当てているのが、『大経』下巻の本願成就文である。したがってそこに説かれる第十七・第十八願成就文を、親鸞は「念仏もうさんとおもいたつこころ」として表白する。この本願成就文こそが、親鸞の生涯を貫く立脚地となるのである。それは如来の覚りが、無量寿・無量光として自我を破って名告り出し、念仏を信じる心に阿弥陀の智慧海を開いて凡夫を念仏者へと転ずるということである。

親鸞は『教行信証』の骨格として、本願成就文に立って真仮八願を選び取る。本願の成就がなければ仏の因願を問題にすることなど凡夫に出来るはずがない。だから親鸞は、本願の成就に立って、凡夫に浄土真宗を実現する因願だけを、八願選び取るのである。その立脚地が先にも述べた、第十七・第十八願成就文である。

『浄土三経往生文類』には、それが「称名信楽の悲願成就の文」と名付けられ、一連の文として掲げられている。したがって『教行信証』で言えば、「行巻」と「信巻」は対応していると見るべきであろう。そうであれば「行巻」の前半の七祖の引文と、「信巻」の前半の三一問答が対応関係にあることになる。その対応を親鸞に教えられることは容易ではないが、これはどちらも道綽の三不三信（自力無効）に立った本願の推究から展開した同根の思索であると思われる。

「行巻」では、個人性を超えて僧伽の伝統を開くところに、大行の法が確保している普遍性がある。「信巻」では、本願の信が三一問答によって大涅槃にまで通達していることを明らかにし、大信の真理性を開示している。大行・大信が普遍的な真理性を開示するところに、『大経』の仏道が大乗の至極であることの証明となるのである。七祖の引文群の中でも、特に中核となるのは善導のところにある親鸞の名号解釈である。「行巻」のそれと「信巻」の三一問答とがどちらも、大涅槃に通達しているという意味で、大行・大信が見事に重なっていると思われる。

「行巻」「信巻」の後半にあるいわゆる重釈要義と言われるところは、前半の本願の道理の開顕に対して、その道理を

生きる身の具体性が表されているところではなかろうか。「行巻」では選択本願の行が誓願一仏乗として衆生に開かれ、「信巻」では本願の三心の道理を生きる身が真仏弟子として表されて、それがお互いに照らし合わせていると思われる。「行巻」誓願一仏乗における転成と不宿が、「信巻」における真仏弟子（転成）と唯除（不宿）として対応しているのであろう。

また、法然と出遇った大きな感動は、自力では絶対に救われないという徹底した懺悔と、光・寿二無量の世界を実現した阿弥陀の本願に対する讃嘆に尽きる。凡夫のままで（懺悔）なぜこのような広大な阿弥陀の智慧海を生きる者になれたのか（讃嘆）、その感動が『教行信証』に貫かれている。換言するなら、師教への恩徳が『教行信証』を貫いているのである。「教巻」には、それが二尊の大悲として仰がれているが、『教行信証』はこの二尊の大悲の恩徳の解明と言っても間違いではなかろう。なぜなら、凡夫が『大経』の本願の名号によって大涅槃を証得するという驚くべき出来事は、二尊の恩徳以外にはないからである。『教行信証』の中に二つの問答があるが、これらがそれぞれ、釈尊と阿弥陀如来の二尊の大悲を解明している親鸞の己証であると思われる。

「化身土巻」の三経一異の問答では、『大経』、『観経』、『阿弥陀経』の顕彰隠密の一異が論じられて、それぞれ第十八願、第十九願、第二十願を当てている。真実と方便の浄土の三部経を、釈尊がどうしても説かなければならなかった真実の意義は、十方衆生を第十八願成就の他力の信心に導くための大悲であると尋ね当てている。さらに、それを主体的に受け止めた親鸞の信仰告白である三願転入によって、本願の経説こそ釈尊の大悲の教言であることを明らかにしていると思われる。

それに対して「信巻」の三一問答では、阿弥陀の大悲を解明している。凡夫の一心に当来の涅槃が感得されることを確かめるのが字訓釈であり、その根拠となる願心の一人働きを本願力回向として明らかにするのが仏意釈である。これによって、涅槃界から立ち上がった法蔵菩薩の兆載永劫のご苦労を解明されるのである。この二つの問答は、凡夫がな

ぜ大涅槃を証得しうるのかという、『大経』の仏道の秘密の解明であるから、互いに表裏の関係を保ちながら『教行信証』を貫いている。これに三経七祖の伝統を詠った已証が「正信偈」であることから、「正信偈」・三一問答・三経一異の問答の三つが、親鸞の已証として、『教行信証』の核心であると思われる。

第二章は、「親鸞の改名について」である。

『教行信証』「化身土巻」の跋文、いわゆる後序には、世を超えるという決定的な意味を持つ法然との出遇いと、念仏の奥義を明らかにしている『選択集』の書写とが記されている。この文章は親鸞の数少ない自叙伝として古くから着目されているが、近年この『選択集』の書写を巡って、新しい問題が提起されている。それは、「また夢の告に依って、綽空の字を改めて、同じき日、御筆をもって名の字を書かしめたまい畢りぬ」という名の字が「親鸞」ではないかという、名の字に関わる問題提起である。

この見解に対して、『教行信証』が『選択集』から何を課題に引き継いだかを明らかにして、親鸞の思想的課題の方面から、その改名について私論を述べたのが本章である。

『選択集』は法然が六十六歳の時に、浄土宗を独立させるという課題のもとに書かれた書物である。「選択」の二字は、法然が異訳の『大阿弥陀経』『平等覚経』の中に発見した文字である。法然はこれに基づいて阿弥陀仏の第十八願を選択本願の名で呼ぶ。選択の二字には、阿弥陀の本願に選択された称名念仏一つを選び取り、そのほかの余行の全てを選び捨てるという、廃立の意義が内に湛えられている。承元の法難でも明らかになったように、廃捨された日本の八宗が挙げて法然を排撃した根本理由は、実にこの選択の二字にあったと言っても過言ではあるまい。事実、『選択集』が法然の滅後、刊行されるが、その後、日本の仏教史上最大の思想戦に発展していく理由は、この本願の信への無理解の一点に収斂される。なぜなら「順彼仏願故」だけは、人間の分別や理解の延長にあるのではない。法然・親鸞の回心を

窺っても、挙体の懺悔という実験によって体得する外に、分かりようがないからである。

このように、浄土門を独立させる専修念仏の絶対性を確保するものは、本願成就の信心である。この信心に挙体の懺悔という人間に起こりようのない出来事が実現するのは、本願が成就した生、すなわち現生正定聚に、如来の真実功徳がはたらき出ているからである。換言すれば、必ず至るべき大涅槃が、本願の道理によって煩悩の身に当来していると自証するのである。そこに、世間を超越した宗教体験の絶対の意味があり、浄土門が大乗の仏道たりうる根本理由がある。

そもそも仏道が大乗を標榜する限り、聖道・浄土を問わず大涅槃の証得、それが根本関心であり究極的な目標である。『選択集』がはからずも引き起こした一大論争に、親鸞が真っ向から答え得るとすれば、その核心は、この大涅槃の証得以外にあり得ない。

親鸞の『教行信証』の課題は、大涅槃の証得が聖道・自力の止観行に依るのではなくて、選択本願の信心に実現することを論証することにあったと、思われる。つまり、他力の信心が実現する正定聚の生には、身は凡夫であっても、やがて必ず実現する大涅槃が、今現にこの身に満ち溢れるように働き出ている。『教行信証』は、その丁寧な論証であるが、その際最も大きな指南を得た祖師が、天親と曇鸞である。

曽我量深は、信行両座の決判と信心同一の問答を、それが伝えられている時期からして、親鸞の『選択集』に対する感想であると指摘する。信行両座の決判は信不退、つまり、信心が涅槃に通達しているということを明らかにする出来事である。信心同一の問答は「如来よりたまわりたる信心」という如来回向の信心ということを問題にしている出来事である。それは、親鸞が『教行信証』に『選択集』からの引用をする際に、「正信偈」の「涅槃の城には信をもって能入とす」という文と、總結三選の文（不回向）を引いていることからも見てとれる。ここに親鸞が『選択集』から継承して明らかにしなければならなかった課題は、大涅槃の証得ということと、それを凡夫に実現する如来回向ということの

二つである。つまり、親鸞は吉水時代にすでに法然の『選択集』には記されていない念仏の信の奥義を、本願力回向と見抜いていたのであろう。本願力回向は『論』『論註』の課題であることから、親鸞は吉水にいる時にすでにそれらを精読しており、その課題が涅槃と回向にあることを見抜いていたと思われる。

これを裏付ける論証として、法然門下の時の自修のための覚書とされる『観経阿弥陀経集註』には、すでに『論』『論註』からの引文が見られることから、親鸞は法然門下時代に『論註』を読み、『大経』の思想を学びとったと考えられるのである。よって、天親・曇鸞から一字ずつ取った「親鸞」という名は、思想的に考えるならば吉水時代にすでに名告っていたと考えられるのである。

第三章では、『選択集』と『摧邪輪』の関係を見ることで『教行信証』の課題を浮彫りにすることを目的としている。これまでの『教行信証』研究では『摧邪輪』の思想的影響についてほとんど言及されていない。しかし、『摧邪輪』の出版された時期からして、『教行信証』の構想にその影響がないと考えるほうが不自然である。

『摧邪輪』は言うまでもなく、『選択集』の反駁の書であるがそのポイントは、二つある。一つは、菩提心を撥無する過失。もう一つは聖道門を群賊悪獣に譬える過失である。この二つの特に、一つ目の菩提心に対する批判が『摧邪輪』の眼目である。菩提心撥無の失とは、法然が『大経』の本願成就文と三輩章の文と弥勒付属の文に出る「乃至一念」を、善導の了解に依って全て称名念仏と読み通した所に、批判の核心がある。その意味で明恵の批判は、単なる菩提心論というよりも、法然の『大経』理解に対するものであると思われる。確かに明恵が言うように、『大経』は「聞其名号　信心歓喜」と聞名を説いており、称名念仏よりも、信心を説く経典である。『大経』に立つ上三祖の、龍樹は「信方便の易行」を説き、天親は「世尊我一心」を説き、曇鸞は「信仏の因縁」を説くことから、『大経』は信心を説くという彼の言い分は正しいであろう。したがって明恵は単なる菩提心論を問題としているのではなくて、彼が言うように、称名念仏

のみを立てて内心（菩提心）を廃捨するのは、法然が口称に囚われた偏執であるということを非難しているのである。明恵の主張は、『大経』の特質から見れば全く的はずれではない。しかし『大経』は、明恵の言う自力の菩提心を説くのではなくて、自力無効を潜った他力の信心を説く経典である。その分岐点は『観経』に依って、善導を観仏三昧に立った仏者と見るか、称名念仏一つで救われた凡夫の仏者と見るかの違いにある。要するに、自力無効の凡夫の自覚がその分かれ目となる。親鸞は、明恵の「菩提心を撥去する過失」に、信巻の「横の大菩提心」と『浄土論註』の回向の名義の引文を中心にして、本願力回向の信心と応えたと思われる。

ところが、親鸞は他の法然門下が採ったように、法然の『選択集』の文を多用して、法然を擁護するという方法を採らなかった。なぜなら法然の『選択集』は、当時の仏教界に全く認知されていなかったからである。『教行信証』の『選択集』の引文は、総結三選の文と「正信偈」の深心の文の二文のみである。『摧邪輪』の批判を見てよく分かることは、『選択集』を誤解する根源は、善導の『観経疏』を自力の仏道と読むところに起因している。したがって『教行信証』は、明恵が無視した三心釈を中心にして、善導の文に丁寧に読み替えをしながら引文する。善導と曇鸞の引文は『教行信証』の二つの高嶺をなしているが、善導の引文は『選択集』の誤解を解くために、疑論を善導の『観経疏』に返して応えたものと考えられる。曇鸞の方は『教行信証』を書く方法に関わるものと、背骨となる二種回向に関するものと考えられることから、同じ高嶺でも、その二つの引文の意図に注意する必要があると考えられる。

くり返すが、明恵の菩提心論は単なる菩提心論というよりも、『観経』に立って『大経』を理解しようとする法然の方法に対する批判であった。明恵の『摧邪輪』の批判を受けて、親鸞が明らかにしなければならなかったのは、法然のように『観経』に立って称名念仏を明らかにするという方法ではなくて、『浄土三部経』の中でも、特に真実教である『大経』に立って『大経』の真理性を顕揚するということである。親鸞の『教行信証』は、『大経』下巻の本願の成就に立って、上巻の因願を推究するという方法を採って、人間と人の世の愚かさをどこまでも見抜かれながら、如来の大般涅槃

に帰っていく仏道である。凡夫であることを一点の誤魔化しもなく本願力に依って必ず仏に転成する仏道であり、それは人間的な一切のものを排除する不宿の働きによって、本願の真理性を住持していく仏道である。その全体を成り立たせるものは何と言っても、善導の明確な自力無効の目覚めである。また、『観経』を拝読すれば、自力無効に導くための釈尊の大悲の教えであるから、深心釈がいかにも目標のように読めるが、『大経』はそうではない。自力無効の目覚めに依って立つことになった本願の仏道が、そこから始まるのである。回心に依って始まる本願の仏道を、仏力と願力の相互成就に依りながら生涯歩み尽くし、その全体が第十八願に包まれて大般涅槃を超証するのである。

親鸞の『教行信証』は、明恵の『摧邪輪』の批判に応えながら法然の仏道の真実義を顕揚して、全人類に開かれた仏道の真理性を開顕したのである。

第四章では、『教行信証』が『大無量寿経』の論書であることを論述する。

明恵の『摧邪輪』が『選択集』を批判した決定的な理由は、本願に対する無理解に尽きるが、大きな視点で言えば、『選択集』が『観経』に立って『大経』を了解した点にあった。したがって親鸞の『教行信証』は、『大経』に立ってその真理性を明らかにする責任を担ったのである。しかし親鸞は、『大経』全体を解説したり、説明したりする方法を採らなかった。求道の要求から言っても、第一章で尋ねたように『大経』の仏道は、真実教との出遇いから始まるが、その出遇いの意味を本願に尋ねていくという方法が必然されるのである。その出遇いの体験を推究していくことを通して、帰することになった本願力に依って仏道を歩かされるのである。その本願の仏道を説くのが『大経』である。親鸞は求道の体験に即して、「教巻」に、『大経』発起序の釈尊と阿難との出遇いを引用するが、その出遇いを中心とする本願のみに着目する。親鸞は、それ以外の所から『大経』を読もうとはしていないと思われる。

その出遇いの意味を教えているのが、『大経』下巻の本願成就文である。ここに親鸞は阿難と釈尊との出遇いを見、自

身の法然との値遇を見たのである。釈尊と阿難との出遇いを発起として説き出された本願の仏道は、仏果の悟りを獲得する他の大乗仏教に選んで、阿弥陀の因の本願を説く仏教である。一切衆生の成仏を誓う阿弥陀如来の本願は、衆生の能力や資質を問わずに、一切の凡夫を漏らさない。その限り『大経』こそ、阿弥陀の方から本願を建て名号一つを選んで（因）、阿弥陀如来の浄土（果）によって一切衆生を救い取るという仏の一人働きを説く経典であり、仏の命が懸った出世本懐経である。衆生は、凡夫のままで本願力によって必ず仏になる道に立たされる、これが『大経』の仏道なのである。その仏道の出発点が師教との出遇いであるが、その深くて広い本願の道理を、『大経』上巻の「三誓偈」に対応して、下巻の最初に、必至滅度の願成就文「超世」、諸仏称名の願成就文「名号に依る救い」、至心信楽の願成就文「貧苦の救い」の、三願の成就文として説かれていた。この本願成就文の経説は、個人の体験や経験を遙かに超えた仏説である。親鸞はこの成就文に法然との出遇いの意味を教えられ、ここに立って諸仏称名の願・至心信楽の願・必至滅度の願の因願を選び、それを標挙として『教行信証』を書くことになるのである。

親鸞の仏道は、本願の名号（光寿二無量の願成就文は『大経』上巻に説かれる）に帰すという法然との出遇いから始まるが、それが必至滅度の願成就文、諸仏称名の願成就文、至心信楽の願成就文の三願の成就で確かめられている。しかしそれは自力から他力への転入であるから、『大経』の下巻では第十九至心発願の願成就文が三輩章として、第十八願成就文と隣り合わせに説かれている。そしてその全体を成り立たせる如来の本願力が、第二十二還相回向の願成就文として挙げられている。ここまでで、衆生の仏道は一応完成したと見ることができよう。

したがってその後に説かれる三毒五悪の悲化段の教説から、対告衆が阿難から弥勒菩薩に変わる。弥勒は一生補処の菩薩として必ず仏になるのだから、本来なら説法する必要はない。それにも拘らず『大経』を説く大聖釈尊は、弥勒菩薩を対告衆として悲化段・智慧段を説くのである。悲化段は、三毒五悪の五濁悪世を超えて願生浄土の仏道に立てという、大悲の教誡であった。さらに智慧段は、それが叶わないときは、その根源に自力の執心の根深さがあることに目覚

めて、第十八の願力広大なる世界を仰ぐ者になれという、大悲大智の果遂の方便が説かれていた。そこから見れば三毒五悪の悲化段は、第十八願の最後の「唯除五逆誹謗正法」という、釈尊の抑止という意味を持つ教誡であろう。そうであればこの唯除の文は、第十九願から第十八願への転入だけではなく、第二十願から第十八願への転入に重要な意味を持っている経説ではなかろうか。

さらに注意しなければならないことは、『大経』の経説が第二十願の成就文で閉じられることである。「不断煩悩得涅槃」を説く『大経』は、群萌の救いを果遂する阿弥陀如来の本願の大悲の仏道である。そうであれば煩悩の身という歴史的な現実を荷負して、常に今の信の一念に願海の一乗を仰ぐ者に果遂する、それが本願の大悲ではなかろうか。しかもそれは凡夫のままで如来摂取の光明海中にあるのだから、衆生の努力を必要とせずに丸ごと願生浄土の仏道に包まれる、そこに『大経』の本願の仏道の眼目がある。第十八願成就の信心に不可思議の仏智を了知して、凡夫のままで浄土に包まれていく、そこに願生浄土の仏道が本願の方から果遂される。しかもその歩みは、命ある限り「昇道無窮極」と続くことを教える為に、第二十至心回向の願成就文が『大経』の最後に説かれるのではなかろうか。

親鸞の『教行信証』は、このように『大経』下巻の本願成就文に立って、上巻の因願を推究した、本願相応の大乗の論書である。成就に立って因願を推究するとは、日々新しく本願の仏智によって煩悩の身の愚かさを知らされることである。本願の智慧に依りながら生涯にわたって、自己自身を明らかにしていく歩みである。その全体が広大無辺際の浄土に包まれて、願生浄土の仏道となるのである。その意味で親鸞の仏道は、人智の分別の愚かさがどこまでも破られていく道であるから、『教行信証』は学的な書であっても、アカデミズムや世間の学とは全く異質な、無我の書である。本願の名号の回向に依って、凡夫のままに大涅槃の風光が輝き出ている、そこに『大経』相応の論書である優婆提舎としての『教行信証』を仰ぐことである。

以上、各章の概要を述べてきた。今後は、これらを『教行信証』研究の視座、骨子として、さらに『教行信証』の精読に入っていく予定である。今回の研究成果を序章とし、山辺・赤沼氏の『教行信証講義』の形式で、「教巻」から「化身土巻」まで精読し、教行で一冊、信証で一冊、真仏土化身土で一冊、という全四冊本として刊行する予定である。